

アクセント指導の一提案

—自律的学習を促すためのモニター力の養成法—

One of Suggestion of Japanese Accent Training;

The Training Method of Self Monitoring to Promote Autonomy Learning

内堀明 (韓国 昌原大学校)

UCHIBORI Akari,(Changwon National University)

要 旨

筆者はこれまで韓国の大学日本語専攻の学習者に対して、次のようなアクセント教育の体系的・継続的实践を試みてきた。①基本知識の導入 ②段階的指導 ③学習者に応じた個人または小単位での指導 ④「覚える」のではなく、正しく「聞き取り」「生成する」ためのモニター力を養うための訓練指導。その結果、学習者の発音・アクセント習得に対する意欲が高まり、アクセントに対するモニター力および生成力が身に付いた。またモニター力が養われることで自律的に学習する効果が期待できた。

The writer tried the systematic, continuous practice of the following accent education on a Korean university Japanese major learner till now: introduction of basic knowledge, step-by-step guidance, guidance that matched the learner to an individual or a small unit, training guidance to develop self-monitoring for precise listening and pronunciation, not for memory. As a result, the will for pronunciation accent acquisition of the learner rises, and self-monitoring and a pronunciation for the accent were developed. In addition, I could expect the effect on self-learning because power of self-monitoring was developed.

【キーワード】 アクセント教育, 音声指導, 体系的・継続的指導, モニター力養成, 自律的学習

1. はじめに

海外における日本語教育現場では、日本語ネイティブとしての日本人教師の役割として、音声指導はその重要なものの一つである。しかし、これまでの日本語教育では音声教育の重要性について度々議論され、その必要性が述べられてきたにもかかわらず、様々な制約のもと実際の教育現場において十分行われてきたとは言い難い⁽¹⁾。とりわけアクセントは教育現場で取り上げるのが難しく、教材や教師側の問題、また学習者の意識の問題等で敬遠されてきた。

本研究は「日本語教育においてアクセント教育は必要か」ということについて再度問題提起を行い、筆者の実践に基づいてその課題を浮き彫りにし、日本語音声教育の現状をもとにアクセント教育の必要性について考察を行うものである。

2. アクセント教育の実践

2-1 経緯と目的

筆者はこれまで韓国の大学日本語専攻の学習者⁽²⁾に対してアクセント教育の体系的・継

続的实践を試みてきた。実践に至った経緯は、以下3点である。

- ①学習者のアクセント習得に対するニーズがあること
- ②アクセントに対するモニター力を養い、それを正しく生成できるよう訓練することで自律的学習を促すことができるのではないかと考えたこと
- ③体系的・継続的に指導することでその効果が得られるのではと考えたこと

その上で以下6点を指導の目的とした。

- ①日本語のアクセントに対する基礎知識を導入すること
- ②アクセントに対する学習意識を高めること
- ③アクセントを正しく知覚し、視覚的に記載できるようにすること
- ④正しいアクセントを生成できるようにすること
- ⑤自らの発話をモニターし、矯正できる力を養うこと
- ⑥以上を段階的・継続的に行なうことで体系的に指導を行ない、学習者が自律的に学習できる力を養うこと

2-2 実践方法

2-2-1 指導の流れ

日本語専攻または副専攻および複数専攻の学習者対象の授業において、まず発音・アクセントの基礎知識の導入および聞き取り練習を行なった後、1年生2学期から2年生2学期までの1年半をかけて、以下のように段階的かつ継続的に指導を行なった。

段階	指導年次・科目	使用教材
単語レベル ↓	1年次2学期「日本語実習2」	『アクセント日本語単語基礎 1500』 ⁽³⁾
短文レベル ↓	2年次1学期「日本語会話1」	
文章レベル	2年次2学期「日本語会話2」	『みんなの日本語』 ⁽⁴⁾ 「問題」部分 Web音声(動画)ニュース(シャドーイング)

表1 段階的音声指導

2-2-2 指導方法

1週間に3課ずつ宿題にし、単語(写真1:左ページ参照)および例文(写真1:右ページ参照)をCDを聞いて練習し、オフィスアワーに研究室に来てもらい、個人又は小グループ単位でチェックを行った。その際、名詞には助詞「が」を付けた状態で練習するよう指導した。なぜなら日本語の名詞のアクセントのうち、平板型と尾高型は助詞のアクセントまで含めなければはっきり区別できないため、練習の段階から助詞をつけた状態で練習するのが、より効果的だと考えたためである。また、例文部分はCDをよく聞いて、アクセントの高低をメモすることを勧めた。そうすることで文章全体の高低の流れをつかんでもらうことを狙うと同時に、複合語や文節のまとまりによってアクセントが変化することを認識してもらうためである。

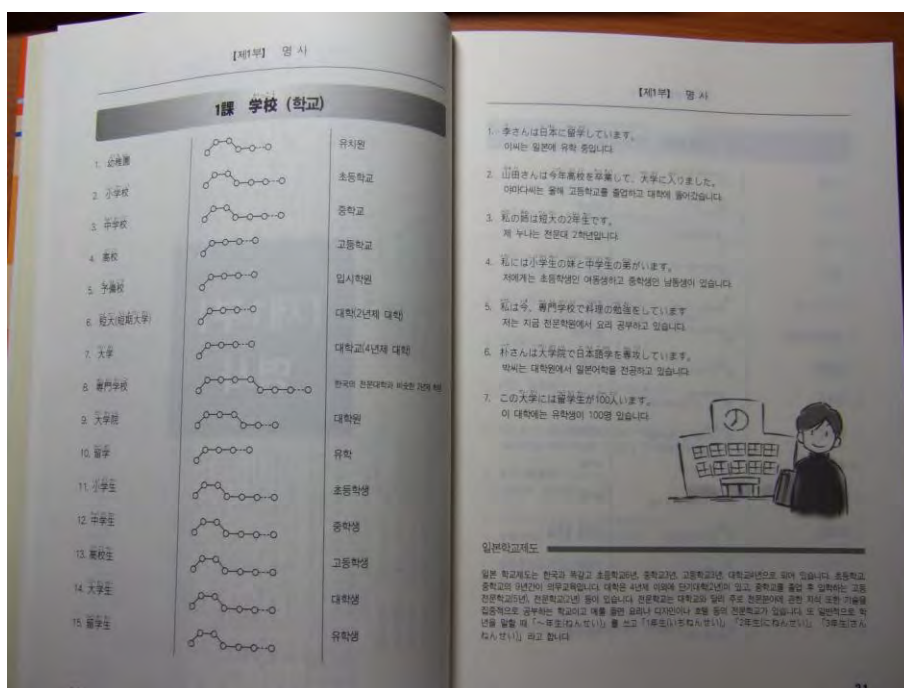


写真1 『アクセント日本語単語基礎 1500』より

1) アクセント・発音に注意しながら単語を読ませる	間違った場合は指摘し、もう一度読ませたり、教師がモデル音を提示する。 特にできない発音、アクセントを取り上げて説明し、練習。
2) 例文を一つ指定して読ませる	文章の中で、単語の発音・アクセントが正しく発話されているかチェックする。

表2 指導方法

2-2-3 評価方法

評価は◎, ○, △の3段階(それぞれ+をつけることもある)で行い、平常点として成績に加えた。

◎	流暢で単語も例文もほとんどミスなし。
○	単語、例文ともにほぼよくできるが、多少ミスがあり、流暢さに欠ける。
△	単語、例文ともにミスが多く、流暢さに欠ける。練習不足。

表3 評価方法

3. 指導の効果と意義

3-1 アンケート調査

3-1-1 アンケート調査概要

以上の実践を行うと同時に、日本語専攻の学習者47人を対象に2008年4月に以下のようなアンケート調査を行った。

WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
2008年度日本語教育実践研究フォーラム

No.	設 問	回 答
1	大学で勉強する前に日本語にアクセントがあることを知っていましたか。	a) 知っていた b) 知らなかった
2	大学で勉強する前に日本語のアクセントについて学んだことがありますか。	a) ない b) 学校（塾）で学んだ c) 自分で勉強した
3	アクセントについてどう思いますか（複数回答可）。	a) 興味がある b) 興味がない c) 重要だ d) 重要ではない e) その他
4	アクセントを学んでみてどう感じましたか（複数回答可）。	a) 難しい b) やさしい c) 面白い d) 面白くない e) その他
5	設問4について、どうしてそう思いますか（記述式）。	
6	アクセントを学ぶ上で難しい点は何ですか（複数回答可）。	a) アクセントを聞いて区別すること b) 正しく発話すること c) 覚えること d) その他
7	アクセントを練習するとき、どんな方法で行いますか（複数回答有）。	a) CDを聞いて本を見ながら読む b) 本だけ見て読む c) CDだけ聞いてリピート d) その他
8	今後もアクセントを勉強したいと思いますか。	a) 思う b) 思わない
9	設問8について、どうしてそう思いますか（記述式）。	
10	アクセントの高低を視覚的に表記することをどう思いますか。	a) 覚えやすい b) あまり助けにならない c) なくてもいい d) その他
11	アクセントを学問（音声学）的に教える必要があると思いますか。	a) 必要だと思う b) あまり必要ではない c) その他
12	アクセントがちゃんとできるようになりたいと思いますか。	a) はい b) いいえ
13	アクセントの勉強について感じたことを書いてください（記述式）。	

表4 アンケート調査表

3-1-2 アンケート調査結果

アンケートの調査結果を以下にまとめる。

No.	回 答	回答数	%	No.	回 答	回答数	%
1	a) 知っていた	19	44.4	7	a) CDを聞いて本を見ながら読む	34	70.8
	b) 知らなかった	28	59.6		b) 本だけ見て読む	4	8.3
2	a) ない	44	93.6		c) CDだけ聞いてリピート	7	14.6
	b) 学校(塾)で学んだ	0	0		d) その他	3	6.3
	c) 自分で勉強した	3	6.4	8	a) 思う	45	95.7
3	a) 興味がある	26	39.4		b) 思わない	2	4.3
	b) 興味がない	3	4.5	9	(記述式)		
	c) 重要だ	34	51.5		a) 覚えやすい	40	85.1
	d) 重要ではない	1	1.5		b) あまり助けにならない	1	2.1
	e) その他	2	3.0		c) なくてもいい	1	2.1
4	a) 難しい	38	58.5		d) その他	3	6.4
	b) やさしい	0	0	未記入	1	2.1	
	c) 面白い	18	27.7	11	a) 必要だと思う	37	78.7
	d) 面白くない	5	7.7		b) あまり必要ではない	2	4.3
	e) その他	4	6.2		c) その他	7	14.9
5	(記述式)				未記入	1	2.1
	a) アクセントを聞いて区別すること	17	23.3		12	a) はい	45
b) 正しく発話すること	34	46.6	b) いいえ	1		2.1	
c) 覚えること	21	28.8	未記入	1		2.1	
6	d) その他	1	1.4	13	(記述式)		

表5 アンケート結果

記述部分のうち主だった回答を以下にまとめる。

No.	回 答
5	<ul style="list-style-type: none"> ・アクセントによって(意味が)変わるから。 ・同音語が多いため単語や文章の正確な意味を知るためには大変役に立つし、面白い。 ・(アクセントの)高低がうまくできないから。 ・状況によって(アクセントが)変わるから(難しい)。 ・アクセントによって単語の意味が変わるため難しいが面白くもある。 ・すでに身につけてしまった発音・アクセントを直すのが難しい。 ・日本語の勉強を始めた時からアクセントの練習をしていなかったから、うまくできないアクセントを直・

	<p>すのが難しい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分がなれてしまった発音と違うので直すのが(難しい)。
9	<ul style="list-style-type: none"> ・完璧な日本語を身に付けたいから。 ・自然に日本人と話せるようになるため。 ・日本人に近い発音をしたいから。 ・正しく発音したいから。 ・日本語がうまくなるために必要だと思う。 ・日本語で話すとき何かおかしいのはアクセントが間違っているためであることが多く、やはり勉強しなければと思う。 ・もっとよい発音ができるようになりたいから。 ・正しいアクセントで日本語を話せば、より自然な日本語になると思うから。 ・究極の目標は日本人のように話せるようになることだから。
13	<ul style="list-style-type: none"> ・とても役に立つ。ドラマやショープログラムを見ても聞き取れることも多いので役に立った。 ・難しいが日本語の勉強に大いに役に立つものだと思う。 ・日本で勉強したとき、アクセントがいいとよく褒められた。またよくできないアクセントはなかなか直らないため、勉強を通して正しく発音できるようになることが重要だと思う。 ・アクセントの勉強はとても面倒でもあったが、勉強するほどうまくなり、聞き取りもよくなった。今後も勉強したい。 ・難しいし、発音するのが大変。 ・面白いし、練習していたときは役に立ったと思うが、今はよく覚えていない。 ・方言と正しい発音を区別することができる。

表6 記述式部分の回答

3-1-3 アンケート結果分析

入学前にアクセントについての知識さえない場合が約6割見られた。「知っていた」と答えた4割のほとんどが2年生だった。また、たとえ知識があったとしてもアクセントについて学んだことがない学習者が約9割を占めた。

次に、アクセントについて「興味がある」「重要だ」と肯定的に捉えている学習者が約9割を占めた。だが、実際に学んでみるとやはり「難しい」と感じている学習者が約6割(58.5%)。ただし、面白いと感じている学習者も約3割(27.7%)いた。また、アクセントの練習が「難しい」と感じる理由としては様々な回答が見られたが、最も多かったのは「アクセントによって言葉の意味が変わること」と、「アクセントを正しく生成すること」であった。

次に、アクセントを学ぶ上で「難しい点」として最も多かったのは、「正しく発話すること」が46.6%、次いで「覚えること」が約28.8%、「アクセントを聞いて区別すること」が23.3%を占めており、やはり聞き取れても正しく生成することができない場合が多いことが伺えた。

また、指導法についての設問には、「CDを聞いて本を見ながら読む」が約7割と圧倒的に多かった。これは教師側でそのように指導していたためだと思われるが、やはり耳で聞くのと同時に視覚的に表示すると覚えやすいようである。

さらに、「今後もアクセントの勉強をしたい」と答えた学習者が95.7%に上った。これは予想以上の反応だった。その理由として、特筆すべきは「日本人と同じように話せるようになりたい」「正確な日本語が話せるようになりたい」という強い学習到達願望が多数を占めた点である。

また、アクセントを視覚的に表記することに対しては85.1%が「覚えやすい」と答えた。やはり視覚的に提示することで、学習を促進する手助けになるようだ。また、今回の指導では個人的に音声学的知識を用いて指導を行ったこともあったが、78.7%が学問的指導が必要だと感じているのには驚いた。

次に、「アクセントがちゃんとできるようになりたいか」という問いに対して、95.7%が「はい」と回答しており、アクセント指導に対する学習者の強いニーズを感じた。最後に、「アクセントを勉強してみて感じたこと」で最も多かったのは、「難しいが面白い、役に立つ、必要だ」という意見と、「今後も続けていきたい」という前向きな意見であった。これはアクセントの勉強が学習者の学ぼうとする「意欲」なくしては上達しないことを考えると、非常に重要な点であると考えられる。

4. 効果と意義

以上の指導実践の結果、次のような効果が見られた。

- ①学習者のアクセントに対する意識の変化が見られ、より発音・アクセント習得に対する意欲が高まった。
- ②アクセントに対するモニター力および生成力が身に付いた。
- ③モニター力が養われることで自律的に学習する効果が期待できた。

指導を続けるに当たり、何より学習者自身のアクセント・発音に対する学習意欲が高まったことは評価できると思われる。特に個人の学習意識の向上もさることながら、クラス全体においても学習意識の向上が見られたことは、非常に意義深い。なぜなら音声面での学習促進は、学習者自身の意識の向上なしには進まなく、いくら教師が指導しても学習者が「習得しよう」という意識を持たなければ、効果は得られにくいからである。

また、アクセントを正しくモニターし、それを表記し、さらに表記したのを見て正しいアクセントが生成できるようになるよう訓練することで、学習者が初めて接した音声に対しても、今後自律的に学習できる力が養えたことは意義深い。実際、指導後も積極的にアクセントに対する学習意欲が見られ、たとえば授業においても教師が一々、アクセントを記さなくても、学習者自身で自らできないものをチェックし、練習する場面が多々見られた。

5. 今後の課題

以上、筆者が4年半かけて行ってきたアクセント指導に関する実践と結果、およびその意義について述べてきたが、今後の課題を以下にまとめる。

- ①韓国国内における音声教育・アクセント教育の現状調査
- ②アクセント指導によって学習者のアクセントがどの程度上達するのか
- ③アクセント習得過程における学習ストラテジーの研究

- ④アクセント習得過程における中間言語研究（地域，母語による違い）
- ⑤具体的かつ有効的な発音・アクセント指導法の研究

注

- (1) 水谷1992, 土岐1992, 1993, 中川(2002)
- (2) 韓国昌原大学校日語日文学科の専門科目において2004年～2008年6月まで4年半実践を試みた。
- (3) 内堀明・斉藤信浩(2003)
- (4) スリーエーネットワーク編(1998)

参考文献

- (1) 鮎澤孝子 (2003) 「外国人学習者の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』7-2, 日本音声学会, 47-58
- (2) 内堀明 (2003) 「初級日本語学習者の文章音読におけるピッチに関する研究—韓国慶尚方言話者の場合—」『日語教育』第二十三号 韓国日本語教育学会, 173-190
- (3) 内堀明 (2008) 「アクセント習得のためのモニター力の養成法」『2007年度活動報告』釜山日本語教師会, 24
- (4) 内堀明・斉藤信浩 (2003) 『일본인과 똑같은 악센트로 말하기 위한 악센트 일본어 단어 —기초 1500—』J&C 出版
- (5) 内堀明・斉藤信浩 (2004a) 「日本語教育におけるアクセント指導の重要性」在韓日本語講師研究会 2月例会口頭発表資料
- (6) 内堀明・斉藤信浩 (2004b) 「日本語教育におけるアクセント指導の提案—『日本人と同じアクセントで話すためのアクセントつき日本語単語—基礎 1500—』出版にあたって」『2003年度活動報告』釜山日本語教師会, 31-34
- (7) 金仁和 (1992) 「韓国人学習者の日本語の韻律における母語の干渉—文レベルでの干渉—」『日本語の韻律に見られる母語の干渉—音響音声学的対照研究(2)—』重点領域研究「日本語音声」研究報告書, 65-79
- (8) スイリポンパイブーン・ユパカー (2005) 「日本語アクセントに関する知識と意識との関連—来日直後のタイ語母語話者の場合—」『日本語教育方法研究会誌』12-02, 14-15
- (9) スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語』初級 I, II
- (10) 土岐哲 (1992) 「日本語音声教育の再検討と一思案—外国人に対する日本語教育を中心に—」『日本語音声の研究と日本語教育:日本語音声国際シンポジウム』桐谷滋, 今石元久編, 269-272
- (11) 土岐哲 (1993) 「日本語音声の韻律的特徴と教育上の問題点」『D1 班研究発表論集』水谷修他編, 27-28
- (12) 戸田貴子 (2008) 『日本語教育と音声』くろしお出版
- (13) 中川千恵子 (2002) 「東京語アクセント習得順序と学習者の意識」『講座日本語教育第38分冊 早稲田大学日本語研究教育センター, 73-93
- (14) 松崎寛・河野俊之 (2005) 「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』125, 57-66
- (15) 水谷修 (1992) 「音声教育の新方策—日本語音声教育の実践計画の提案」『日本語音声

WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
2008年度日本語教育実践研究フォーラム

の研究と日本語教育:日本語音声国際シンポジウム』桐谷滋, 今石元久編, 265-268